

中学校 社会

中学校社会科歴史的分野において、社会参画の資質や能力の基礎を培う単元構成の在り方
—身近な地域の歴史「垂柳遺跡」の教材化をとおして—

義務教育課 研究員 佐藤 大志

要 旨

中学校社会科歴史的分野において社会参画の資質や能力の基礎を培うため、身近な地域の歴史において、歴史的事象と生徒自身との結び付きを実感させ、学習内容を基に地域が抱える課題の解決策を考える学習活動を取り入れた単元構成をした。これによって、地域の文化財の価値や大切さに気付き、自分たちで地域の良さを広めていこうとする生徒の意識について有意な相関が高まり、実社会へ積極的に関わろうとする意欲が向上する可能性が示された。

キーワード：中学校 社会科 歴史的分野 社会参画 身近な地域の歴史

I 主題設定の理由

1 社会科の目標から

小・中学校の社会科の目標で共通するところは、「公民的資質の基礎を養う」ことである。この公民的資質について、小学校学習指導要領解説社会編（2008）では「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎をも含むものであると考えられる」と説明されている。つまり小・中学校では七年間の社会科学習をとおして、より良い社会の形成に参画する（以下、「社会参画」とする）資質や能力の基礎を培う必要がある。

ところが、図1に示したように、全国学力・学習状況調査質問紙調査（2015）の結果によると、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えたことがありますか」という質問に対して、「当てはまる」または「どちらかといえば当てはまる」という肯定的な回答をした生徒は、年々上昇傾向ではあるものの、平成25～27年度の三年間で最も割合が高かった平成27年度でも32.9%であった。また図2に示したように、「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」（2009年）では、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という質問に対し、「全くそう思う」または「まあそう思う」という肯定的な回答をした日本の中学生の割合は37.3%であり、四か国中最下位であった。この調査結果から、日本の中学生の社会参画の意識は相対的に高くないことを読み取ることができる。

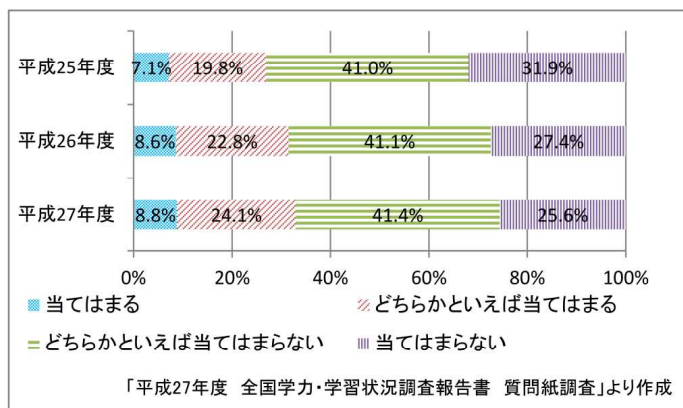


図1 「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えたことがありますか」への回答

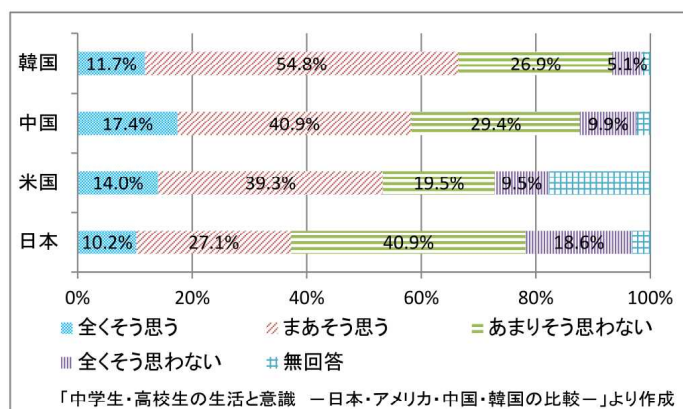


図2 「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」への回答

筆者のこれまでの実践を振り返ってみても、社会参画の資質や能力の基礎を培うことを意識した授業を実践してきたとは言い難い。しかし、平成27年に選挙権年齢を満18歳以上に引き下げる公職選挙法等の一部改正が行われ、平成28年からは実際に現役高校生が社会参画の最も代表的な機会である投票に加わった。社会参画の意識は一朝一夕に育成されるものではないため、今後は義務教育段階から社会参画の資質や能力を培っていくことが、今まで以上に重要視されると考えられる。

2 歴史的分野の学習に対する中学生の意識について

平成20年に、国立教育政策研究所から「特定の課題に関する調査（社会）」（2008）の結果が公表された。図3は、地理・歴史・公民の三分野それぞれについて「この分野の学習をすれば、私のふだんの生活や社会に出て役立つと思いますか」という質問に対する回答をまとめたものである。この質問に対して、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした生徒の割合は、公民的分野では85.3%、地理的分野では72.9%であったのに対し、歴史的分野では42.7%にとどまった。つまり、半数以上の中学生が現在の生活や将来にわたって歴史的分野の学習が「役立つ」とは感じていないことを示している。

この状況は、林・藤原・佐伯（2005）や池野（2006）らが述べている「歴史的分野の学習が生徒にとって断絶した過去（昔話）になっている」、「既存のもので、現在の社会と結び付かない」ことなどに関連していると思われる。

これまでの筆者の実践を振り返ると、歴史的事象と生徒自身との結び付きを実感させたり、歴史的分野で学習したことが現在の生活や社会に役立つと実感させたりするような授業を行ったことがないため、歴史的分野の授業において社会参画の意識の向上を図ることができるような学習活動に取り組ませたいと考えた。

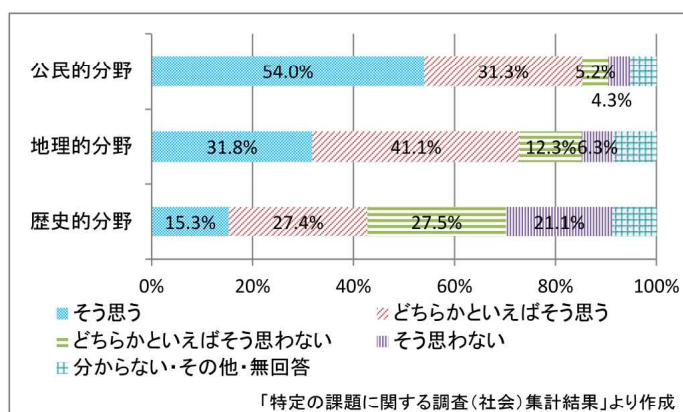


図3 「社会科三分野の学習が自分の生活や社会に出て役立つか」への回答

3 歴史的分野における社会参画について

伊藤（2013）は、重要伝統的建造物群保存地区に指定され、観光客が多く訪れるようになった城下町を教材化した実践事例を基に、「町づくりにおいて、『地域の発展』や『よりよい社会の形成』のために、歴史学習の成果をどのように活かすかが、歴史的分野における『社会参画』といえよう」と述べている。つまり、身近な地域の歴史の学習において、地域の歴史的文化財の価値に気付かせ、それを地域の発展につなげる方法を考える学習活動を取り入れた単元構成をすることにより、歴史的分野における社会参画の資質や能力の基礎を培うことができるのではないかと考え、主題を設定した。

II 研究目標

中学校社会科歴史的分野において、社会参画の資質や能力の基礎を培うためには、身近な地域の歴史の単元で、歴史的事象と生徒自身との結び付きを実感させ、実際に地域が抱える課題についての解決策を考えさせる学習活動を取り入れた単元構成をすることが有効であることを、実践をとおして明らかにする。

III 研究仮説

中学校社会科歴史的分野の身近な地域の歴史の単元において、次の学習活動を取り入れた単元構成をすることで、社会参画の資質や能力の基礎が培われていこう。

- (1) 歴史的事象が生徒自身と結び付いている実感を伴う学習活動
- (2) 学習内容を基に、地域が抱える課題についての解決策を考える学習活動

IV 研究の実際とその考察

1 社会参画の資質や能力の基礎について

「参画」は語義的には「参加」の類義語とされているものの、厳密には両者に違いがある。「参加」は既存の団体や組織、行事などに加わることを意味するのに対し、「参画」は企画などの段階から加わることであり、新たなものをつくり上げていく意味が含まれている。つまり「参画」は「参加」に比べ、より積極的な行為としての意味があり、「社会参画」とは、より良い社会を形成するための企画などを考え、行動することと考えられる。

一方で、北（2014）は、社会参画について「中学生にいますぐに社会参画できるようになることを目指しているものではなく、将来社会人になったときに求められる人間像を示したもの」としており、「社会科の時間に子どもたちが社会に直接かかわる参画場面を取り入れることを求めているわけではない」と述べている。このことは、中学校第3学年で学習する公民的分野の最後の内容である「（4）私たちと国際社会の諸課題」の「イ よりよい社会を目指して」において、「社会参画の手掛かり」を得ることを目指していることと一致すると考えられる。つまり、中学校社会科の授業においては実社会に対して具体的な行動を起こすことではなく、将来のより良い社会の実現に向けて何ができるかを考え、積極的に関わろうとする意欲をもたせることが必要だと考えられる。そこで、本研究では社会参画の資質や能力の基礎を生徒が自ら積極的に実社会へ関わろうとする意欲と考える。

2 社会参画の資質や能力の基礎を培うためには

北（2014）は、「社会的な事象や出来事など社会のことを他人ごととして捉えている状態では、社会により良く関わろうとする意識が芽生えないため、社会や社会的な事象と自分自身や自分たちの生活との結び付きを理解させることをとおして、社会や社会的な事象を『自分ごと』として捉えさせ、社会との関わりを考えさせるようにすることが必要である」という主旨のことを述べている。また、「問題解決的な活動は社会科授業の言わば『本体』であり、家に例えれば『母屋』に当たる部分」とも述べている。よって、社会参画の資質や能力の基礎を培うためには、課題解決的な学習を基盤に、社会的な事象と生徒自身との結び付きを実感させる場面を意図的に設定した単元構成が重要になると考えた。

そこで図4のように、本研究では、①当時の人々の活動が現在と結び付いていることに気付かせる、②実物の見学をとおして歴史的な事象を実感させる、③当時の人々の考えなどを想像させるという学習活動を、生徒にとって親近感を感じやすい身近な地域の歴史の単元に、意図的に取り入れることで、歴史的な事象と生徒自身との結び付きを実感できるのではないかと考えた。さらに、基盤となる課題解決的な学習では、単元全体の学習課題として、地域が抱えている実際の課題を取り上げ、単元の学習内容を基に、その解決策を生徒に考えさせる必要があると考えた。これにより、歴史的な分野の学習内容が地域の発展のために生かされるとともに、生徒が地域の課題解決策を具体的に考え、自ら積極的に実社会へ関わろうとする意欲の向上につながると考えた。

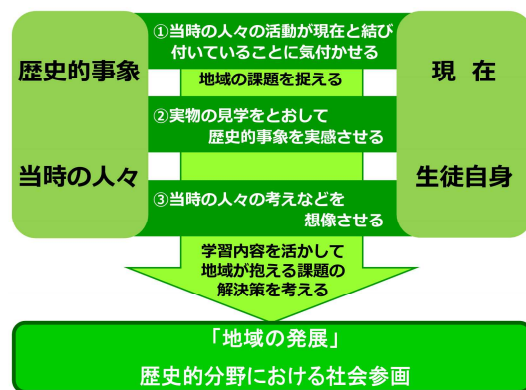


図4 身近な地域の歴史の単元構成のイメージ

3 研究協力校における身近な地域の歴史について

研究協力校の所在地である田舎館村は稲作が盛んに行われ、地域おこしイベント「田んぼアート」で注目されており、「垂柳遺跡」の所在地でもある。この垂柳遺跡からは、弥生時代中期（約2100年前）の水田跡が656枚発見されている。昭和56年に初めて水田跡が発見された際には、北緯40度以北の寒冷地でも弥生時代に稲作が行われていたことを実証する遺跡として大きな注目を浴びた。また、平成12年には国史跡に指定され、現在、垂柳遺跡から出土した遺物や弥生時代の人々の足跡、垂柳遺跡と基幹水路を共有した「高樋遺跡」の水田・水路遺構が田舎館村埋蔵文化財センターに保存、展示されている。そして、垂柳遺跡で栽培されていたと考えられる品種の稲を用いて地域おこしをしようと、田舎館村役場を中心として田んぼアートが始まった。つまり、垂柳遺跡は田んぼアートのきっかけとなった存在でもあるため、歴史

的事象と生徒が生活する現在との結び付きを実感することができる素材であり、歴史的分野の学習において社会参画の資質や能力の基礎を培うために有効な地域教材となり得ると考えた。

垂柳遺跡の教材化にあたっては、弥生時代の歴史的事象と生徒自身の結び付きを実感させるために、①弥生時代の遺跡と現在の地域との結び付きを生徒に気付かせ、単元全体の学習課題を設定する、②田舎館村埋蔵文化財センターを見学する、③現在の稲作と弥生時代の稲作を比較し当時の人々の苦労を想像するという三つの学習活動を設定した。さらに「田んぼアートのきっかけとなった垂柳遺跡ではあるが、人々の関心が低く、田舎館村埋蔵文化財センターの来館者数が少ない」という地域が抱える課題の解決策を考えるという学習活動を取り入れた単元構成とした。

4 検証授業の実際

検証授業は研究協力校の第1学年の生徒59名を対象に、平成28年6月6日から平成28年7月15日の期間に実施した。縄文時代、弥生時代、古墳時代について教科書の単元に沿って学習した後、身近な地域の歴史の学習を全6時間で実施した。以下に実際の授業について記述する。

(1) 第1時「現在と結び付く垂柳遺跡」

弥生時代の遺跡と現在の地域との結び付きを生徒に気付かせ、単元全体の学習課題を設定する時間である。まず、田舎館村の田んぼアートは、全国各地でも行われている田んぼアートの元祖であるが、そのきっかけが垂柳遺跡であり、その発掘なくして田んぼアートは生まれなかったということを生徒に伝え、歴史的事象と生徒が生活する現在が結び付いていることに気付かせた。次に、年間30万人もの観光客が訪れている田んぼアートに対し、田舎館村埋蔵文化財センター来館者は年間3000人程度であるという事実を伝えた。そして、田んぼアートと、それに結び付いているはずの遺跡に対する人々の関心に大きなギャップがあることから、垂柳遺跡をこのままにはおけないという切実感を高めた。地域が抱える課題として①田舎館村埋蔵文化財センターの来館者数が少ないこと、②垂柳遺跡の保存・活用に携わる方々が高齢化していることを確認し、単元全体の学習課題「垂柳遺跡をこれからどうしていけばいいのだろう」を設定した。

(2) 第2、3時「埋蔵文化財センター見学」

田舎館村埋蔵文化財センターにおいて、垂柳遺跡に関する様々な情報を収集しながら、実物の見学をとおして、遺跡の特色について調べ、遺跡の良さを実感する時間である。田舎館村文化財担当職員や地域在住の解説員の協力を得ながら見学を実施した。生徒には見学の視点として、①既習の弥生文化と同じところ、②既習の弥生文化と違うところ、③見学して初めて発見したところの3点を示し、見学した内容をワークシートに記入させた。また、どの視点に当てはまるものかその場で判断できないものは、ワークシートの裏面や欄外に記入させ、得た情報は第4時に整理することとした。

(3) 第4時「垂柳遺跡の特色」

田舎館村埋蔵文化財センター見学をとおして収集した様々な情報を共有し、垂柳遺跡の特色を捉える時間である。見学でワークシートに記入してきたことを発表させながら、得た情報がどの視点に当てはまるものか全体で整理した。

(4) 第5時「垂柳遺跡での稲作の様子」

弥生時代における垂柳遺跡での稲作と現在の稲作との比較をとおして、垂柳遺跡で生活していた人々の苦労を想像し、弥生文化の特色である稲作と、その稲作が行われていた垂柳遺跡に対する見方を深める時間である。機械化された現在と手作業で行った弥生時代との比較、収穫量の違い、弥生時代は水田を広げる作業も行ったことなど、より具体的に弥生人の稲作を想像させた。また、なぜ垂柳遺跡の弥生人が苦労してまで稲作を行ったか考えさせ、最後に、垂柳遺跡の弥生人のことをどう思うか記述させた。

(5) 第6時「垂柳遺跡のこれから」

本単元のまとめとして、これまでの学習内容を基に地域が抱える課題の解決策を考える時間である。地域が抱える課題である、①田舎館村埋蔵文化財センター来館者数が少ないこと、②垂柳遺跡の保存・活用に携わる方々の高齢化の2点を確認し、本時の学習課題を「垂柳遺跡の課題を解決するためには、これからどうしていけば良いか考えよう」と設定した。

①の課題解決のため、垂柳遺跡のどんな点をPRすれば田んぼアートを訪れた観光客が田舎館村埋蔵文化財センターに来館するようになるかについて、個人でPRポイント候補と候補に挙げた理由をワークシートに記入させた。その後、一班5人程度の中で一人一人のPRポイント候補を発表し合い、KJ法を用いてそれらを整理し、班で一つのPRポイントを選定、発表させた。

②の課題解決については、本時の学習課題に「誰」が課題解決の中心となるべきかも含め、「垂柳遺跡の課題をこれから解決するためには、誰が、どうしていけば良いか」という内容を文章で記述させた。

5 結果と考察

(1) 歴史的事象が生徒自身と結び付いている実感を伴う学習活動

表1は田舎館村埋蔵文化財センター見学において、見学の視点ごとに生徒が記述した項目数の平均と、主な記述内容をまとめたものである。「見学して初めて発見したところ」が他の二つの視点より多く記入されていることが分かる。

表1 見学時に生徒がワークシートに記述した項目数の平均と主な内容

見学の視点	平均記述数(個)	主な記述内容
既習の弥生文化と同じところ	1.5	・水田がある ・稲作が行われている ・弥生土器がある
既習の弥生文化と違うところ	1.8	・縄目文様の弥生土器がある ・弥生土器に蓋がある ・金属器が無い ・石包丁が無い ・土偶がある
見学して初めて発見したところ	4.7	・水田が小さい ・畦が狭くて低い ・656枚の水田跡が発見された ・東北地方でも弥生時代に稲作が行われていた ・約20種類の米がある ・炭化米が発見された ・弥生土器は軽い ・弥生人の足や身長は小さい

また、主な記述内容を見ると、「既習の弥生文化と違うところ」では、弥生土器の文様や形状について、また「見学して初めて発見したところ」では、水田跡の形状や弥生土器を持った感触、弥生人の身体的な特徴など、「既習の弥生文化と同じところ」に記述された内容よりも詳しく具体的な記述が多く見られた。

また、見学後の感想には、表2のように、「見学して初めて発見したところ」について記述する生徒が多かった。垂柳遺跡が教科書や資料集での学習だけでは分からないことが様々発見できる遺跡で、価値あるものと考えられるようになったと考えられる。さらに、表3のように、価値ある遺跡が存在する田舎館村に対して愛情を深めたと考えられる記述をした生徒も見られるようになった。

表2 見学後の感想に記述された内容

既習の弥生文化と同じところについて記述	既習の弥生文化と違うところについて記述	見学して初めて発見したところについて記述
13名	19名	54名

表3 埋蔵文化財センター見学の感想(抜粋)

生徒A	埋蔵文化財センターを見学して、新しく知ったこともあったし、勉強したことをより深く知ることだってとてもおもしろかったです。印象に残ったのが、壺や甕の蓋にある四つの小さな穴のことです。垂柳遺跡がある田舎館村に住んでいることを誇りに思います。
生徒B	埋蔵文化財センターを見学して、改めて垂柳遺跡が貴重だと実感しました。歴史的大発見で教科書の内容も変わるほどすごいことだと思いました。とても大事で貴重な弥生時代の遺跡がある、私の住んでいる田舎館村を誇りに思い生活したいです。
生徒C	私が埋蔵文化財センターに行って一番印象に残っている事は、田舎館で小さい田んぼが656枚見つかったという事です。私はその話を聞いて、こんな面積の小さな村にもそんな素晴らしい歴史があるんだと思いました。

表4は、弥生時代の稲作と現代の稲作の作業を具体的に比較し、当時の稲作はどのような作業だと思ったか、生徒に記述させた結果である。全ての生徒が、弥生時代の稲作は多くの苦勞を伴うことだと想像した。その上で、弥生時代の人々が苦勞しながらも稲作を行った理由について、班で話し合わせた。主な理由として出されたものは「米は長期間保存できるから。」「食料を安定させるため。」「食料を豊富にするため。」「米は栄養が豊富だから。」であった。生徒は、既習事項である稲作の広まりや米の保存の背景に、弥生時代の人々の努力や工夫があったことを想像できたと思われる。最後に苦勞しながらも稲作を行った垂柳遺跡の弥生人のことを想像して思ったことや感じたことを記述させた。表5は、その記述内容について分類し、まとめたものである。多くの生徒が垂柳遺跡の弥生人は苦勞しながら稲作に取り組んでいたことを理解したと考えられる。その中で22名の生徒は、表6のように、垂柳遺跡の弥生人に対して共感を深めたと考えられる記述をした。これら生徒は垂柳遺跡を、先人の努力や工夫の跡を残す価値ある存在だと捉えた可能性がある。

表4 当時の稲作に対する生徒のイメージ

弥生時代の稲作はどのような作業か	人数
大変な作業	48
地道な作業	3
手間のかかる作業	3
過酷な作業 時間がかかる作業 疲れるような作業 体を使うような作業 手作業	各1

表5 苦勞しながらも稲作を行った垂柳遺跡の弥生人のことを想像して思ったことや感じたこと

記述内容	垂柳遺跡の弥生人の苦勞について記述	垂柳遺跡の弥生人を想像する学習活動の感想を記述	学習活動の中で新たに生じた疑問点を記述	記述無し
人数	52名 (うち共感を深めた記述 22名)	4名	1名	2名

表6 垂柳遺跡の弥生人に対する共感的な記述 (抜粋)

生徒 D	2100年前の垂柳の人々は稲作をする時、一つ一つ「手間」をかけて作っていて大変な思いもしたし、やっぱり昔の人はすごいと思いました。
生徒 E	垂柳の人々は仕事がしやすいように水田を工夫し、大人から子どもまで稲作を行っていることが分かりました。私はこんな大変な作業を続けて行っていて、すごいなあと思いました。
生徒 F	当時の人は寒い中でも米を作ってすごいと思いました。みんなでやって苦しい作業も終わらせて頑張ったと思いました。
生徒 G	僕は現在と違って大変な稲作を2100年前の人々はやっていますすごいと思いました。僕は昔はほとんど手作業だったし、大変な稲作をきちんとできた2100年前の人々は強い人々だったと思いました。

(2) 学習内容を基に、地域が抱える課題についての解決策を考える学習活動

表7は、田舎館村埋蔵文化財センターの来館者数が少ないという地域が抱える課題を解決するために、生徒が個人で考えた田舎館村埋蔵文化財センターPRポイント候補についてまとめたものである。実際に生徒が挙げた候補は、多い順に水田跡、弥生土器、弥生人の足跡であった。PRポイント候補に選んだ理由として、水田跡・弥生土器とも、実際に触れられるという記述が最も多かった。田舎館村埋蔵文化財センター見学での学習が大きく影響したと考えられる。また、垂柳遺跡の弥生人の工夫に関連する理由を記述した生徒は5名で、弥生時代における垂柳遺跡の稲作について想像した学習の影響と考えられる。

表7 個人が考えた埋蔵文化財センターPRポイント候補

個人が考えたPRポイント候補	人数(複数可)	PRポイント候補に選んだ理由(人数)
垂柳遺跡の時代の水田跡	44	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に歩いたり、触れたりできる(18) ・今の水田より小さく、見た人は驚く(12) ・656枚も見発見されている(5) ・弥生人の工夫が見られる(5) ・田んぼアートのかきつけ(2) ・当時の水田を実際に見られる(2)
垂柳遺跡の弥生土器	39	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に持ったり、触れたりできる(14) ・さまざまな形の土器がある(8) ・縄目文様の弥生土器もある(7) ・台付鉢や蓋など教科書にないもの(5) ・どのように使っていたか分かる(4) ・たくさん展示されている(1)
垂柳遺跡の弥生人の足跡	28	<ul style="list-style-type: none"> ・弥生人の足の小ささが分かる(13) ・教科書に載ってない足跡を見られる(11) ・たくさんの足跡がある(1) ・さまざまな形の足跡がある(1) ・弥生人の特徴が分かる(1) ・自分の足と比べられる(1)

表8は、各班が選定したPRポイントである。全12班中、10班が水田跡を選んでおり、その内6班が実際に触れたり歩いたりできる点を理由として挙げた。個人が考えたPRポイント候補の集計結果と同様、現地見学時の学習内容が影響したものと考えられる。

班でPRポイントを選定した上で、「垂柳遺跡の課題をこれから解決するためには、誰が、どうしていけばよいか」について生徒にまとめさせた。表9は、生徒の記述内容を基に作成したものである。解決策として生徒はPRすべき内容を記述していた。生徒の中には方法や対象も合わせて記述したものもいた。内容に関しては、班で選定したポイントをPRしていけばよいと考えた生徒がほとんどであった。また、

表8 各班の埋蔵文化財センターPRポイント

班	PRポイント	選定理由	班	PRポイント	選定理由
①	水田跡	弥生時代の水田の上を実際に歩けるから	⑦	水田跡	実際に水田の上を歩いたり、触れたり、写真を撮影できるから
②	水田跡	実際に歩くなど、貴重な体験ができるから	⑧	水田跡	今の田んぼアートは、弥生時代の水田での稲作がきっかけだから
③	畦	今よりも低くて狭いことを知らない人が多いと思うから	⑨	水田跡	畦の特色や見つかった水田の数を知らせると人々の関心が高まるから
④	水田跡	サイズや発見された数に驚くと思うし、実際に歩けるから	⑩	水田跡	垂柳の水田発見が東北地方にも弥生文化が広まったことを実証したから
⑤	水田跡	水田のサイズを小さくした弥生人の工夫の跡を見られるから	⑪	水田跡	実際に歩くことや触ることができるから
⑥	田んぼアートとの関係	田んぼアートの始まりに垂柳遺跡が大きく影響しているから	⑫	水田跡	水田に触ったり、上を歩くことができるから

表9 垂柳遺跡の課題解決策

	解決策	人数
内容	班で選定したポイントをPRする	51
	垂柳遺跡のことについて更に学んだことをPRする	6
	班で話し合ったことと自分で考えたポイントをPRする	2
方法	パンフレット・インターネットなどでPRする	17
	田んぼアートとセットでPRする	2
	修学旅行など学校行事でPRする	2
	ボランティア部を作ってPRする	2
	自分たちの考えを村長に提案する	2
	新しいイベントを開催する	2
	入場割引をする	2
対象	教科書に垂柳遺跡を載せる	1
	他市町村や他県にPRする	2
	弥生時代の垂柳遺跡のことを海外にも広める	1
	旅行会社にPRする	1

垂柳遺跡について更に学び、その内容をPRするという意欲的な生徒もいた。表10は、地域が抱える課題を誰が解決していくべきかについて生徒の考えを集計したものである。「自分たち」が行動すべきだと答えた生徒が42名だった。これらの生徒は、地域が抱える課題に対して積極的に関わろうという意欲が生じたと考えられる。

(3) アンケート調査の結果

図5は、検証授業の事前・事後において生徒に対して実施したアンケートの質問項目の一部である。表11は、この質問項目の回答から垂柳遺跡への意識を数値化し、単元の学習前・後で平均値の差についてt検定を行い、まとめたものである。その結果、「垂柳遺跡にはよい点があると思いますか」、「垂柳遺跡は大切だと思いますか」、「垂柳遺跡のことを、村外の人に知ってほしいと思いますか」において有意な平均値の上昇が認められた。したがって、本研究による単元の学習後において、垂柳遺跡はよい点がある大切な遺跡で、村外の人にも知ってほしいという生徒の意識が向上したと考えられる。

また、図5の各質問項目について相関分析を行ったところ、事前調査の結果は表12、事後調査の結果は表13のようになった。「垂柳遺跡によい点がある(1)」という意識と「垂柳遺跡は大切だ(2)」という意識には事後において相関係数が大きく上昇し、強い相関関係が認められるようになった。また「垂柳遺跡を村外の人に知ってほしい(3)」という意識と、「垂柳遺跡にはよい点がある(1)」、「垂柳遺跡は大切だ(2)」という意識にも、事後において相関係数が上昇し、相関関係が認められるようになった。これらの結果から、本研究の授業の実施により「垂柳遺跡のよい点を知ること」、「垂柳遺跡の大切さを認識すること」、「垂柳遺跡のことを村外の人に知ってもらいたいこと」の三つの生徒の意識を強く結び付けることができ、いずれかの意識が向上すると、他の意識も向上する関係へと高めることができたと考えられる。

V 研究のまとめ

本研究では、社会参画の資質や能力の基礎を、生徒が自ら積極的に実社会へ関わろうとする意欲と考え、身近な地域の歴史の単元において、歴史的事象が生徒自身と結び付いている実感を伴う学習活動と、学習内容を基に、地域が抱える課題についての解決策を考える学習活動を取り入れ、授業を実施した。田舎館村埋蔵文化財センター見学をとおして、新たに多くの発見をしたり、苦勞をしながら稲作を行ったであろう垂柳の弥生人の姿を具体的に想像したりすることで、生徒は垂柳遺跡が価値ある存在だと認識できたことが、アンケート調査の「垂柳遺跡にはよい点があると思いますか」と「垂柳遺跡は大切だと思いますか」の平均値上昇につながったと考えられる。そして、これら二つに関する意識の変化が、「垂柳遺跡のことを村外の人にも知ってほしい」という意欲や、地域の課題解決は自分たちが行えば良いというような実社会へ積極的に関わろうとする意欲の高まりにつながったと考えられる。

表10 垂柳遺跡の課題を誰が解決すべきか

誰が解決すべきか	人数	誰が解決すべきか	人数
自分たち	42	ボランティアの人々	1
埋蔵文化財センターの人	5	村長	1
地域のゆるキャラ	2	昔の人が好きな人	1
村民みんな	1	田んぼ好きな人	1

垂柳遺跡にはよい点があると思いますか。 そう思う どちらかといえば そう思う どちらかといえば そう思わない 分からない
垂柳遺跡は大切だと思いますか。 そう思う どちらかといえば そう思う どちらかといえば そう思わない 分からない
垂柳遺跡のことを、村外の人に知ってほしいと思いますか。 そう思う どちらかといえば そう思う どちらかといえば そう思わない 分からない

図5 事前・事後アンケート

表11 垂柳遺跡についての意識の変容

質問項目	調査時期	n	平均(SD)	t値
垂柳遺跡にはよい点がある と思いますか。	事前	59	2.17(1.66)	2.99**
	事後	59	2.85(1.48)	
垂柳遺跡は大切だと思いま すか。	事前	59	2.42(1.58)	2.09*
	事後	59	2.92(1.49)	
垂柳遺跡のことを、村外の人 に知ってほしいと思いますか。	事前	59	2.44(1.55)	2.71**
	事後	59	3.03(1.20)	

注：** $p < .01$, * $p < .05$

表12 垂柳遺跡についての各質問間の相関（事前）

質問項目	(1)	(2)	(3)
垂柳遺跡にはよい点がある と思いますか。	(1)		
垂柳遺跡は大切だと思いま すか。	(2)	.32*	
垂柳遺跡のことを、村外の人 に知ってほしいと思いますか。	(3)	.15	.32*

注：* $p < .05$

表13 垂柳遺跡についての各質問間の相関（事後）

質問項目	(1)	(2)	(3)
垂柳遺跡にはよい点がある と思いますか。	(1)		
垂柳遺跡は大切だと思いま すか。	(2)	.74**	
垂柳遺跡のことを、村外の人 に知ってほしいと思いますか。	(3)	.66**	.54**

注：** $p < .01$

VI 研究の課題

まず、事後のアンケート調査の結果から垂柳遺跡を大切だと認識できなかった生徒が3名いることが分かった。より一層、生徒による主体的な学習展開になるような工夫が必要である。例えば、歴史的事象と現在の結び付きに気付かせる場面において、生徒は田んぼアートの特徴として豊かな色彩を稲の品種の違いだけで表現できる点を挙げていた。このことから古代米に注目させ、生徒同士の話し合いをとおして垂柳遺跡と田んぼアートの結び付きに気付くことができたと考えられる。また、見学して得た情報を整理・分析し、垂柳遺跡の特徴を生徒自身の言葉でまとめさせるための十分な時間の確保も必要であった。さらに、垂柳の弥生人の稲作について想像させる場面では、現地で実物を見ながら想像させるなどの工夫をすることで、より思考が深められたと考えられる。

次に、本研究の授業実施後、歴史的分野の学習を好きになった生徒が質問紙から認められたが、社会科全般を好きになるところまでは及ばなかった。今後、地理的分野、公民的分野でも身近な地域の題材を意図的に取り上げることで改善の可能性があると考えられる。例えば、地理的分野の身近な地域の調査において、田舎館村にとって基幹産業である農業や、成長を期待できる観光産業の視点から地域の将来について考えたり、公民的分野の地方自治において、遺跡保存・活用も含めて村の将来的な展望を考えたりすることも考えられる。そうすることによって、生徒は社会科で学んだことを生かし、自ら積極的に実社会に関わろうとする意欲を更に高め、社会科全般を好きになることにつながるのではないかと考えられる。

<引用文献・URL>

- 1 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編（平成20年8月）』, p.12
- 2 文部科学省・国立教育政策研究所 2015 「平成27年度 全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」, p.54
http://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukoku/report/data/qn_02.pdf (2017.1.10)
- 3 一般財団法人日本児童教育振興財団内日本青少年研究所 2009 「中学生・高校生の生活と意識 ―日本・アメリカ・中国・韓国の比較―」, pp.15-16
<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/reserch/2009/tanjyun.pdf> (2017.1.10)
- 4 国立教育政策研究所 2008 「特定の課題に関する調査（社会）集計結果」, p.188, p.284, p.373
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_shakai/06002020000007002.pdf (2017.1.10)
- 5 林哲哉・藤原孝章・佐伯真人 2005 「「選択・判断」で捉える中学校歴史的分野の授業開発 ―単元「第二次世界大戦」を例に―」 『富山大学教育実践総合センター紀要』, p.113
<http://www.cerp.u-toyama.ac.jp/bulletin/bulletin2005/11Hayashi.pdf> (2017.1.10)
- 6 池野範男 2006 「市民社会科歴史教育の授業構成」 『社会科研究（第64号）』 全国社会科教育学会, p.51
<http://ci.nii.ac.jp/els/110007997192.pdf> (2017.1.10)
- 7 伊藤純郎 2013 『究極の中学校社会科 ―歴史編―』, p.12, 日本文教出版
- 8 北俊夫 2014 「社会参画の資質をどう育てるか」 『新・社会科授業研究の進め方ハンドブック』, pp.83-87, 明治図書

<参考文献>

- 1 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 社会編（平成20年9月）』
- 2 北俊夫 2012 『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』 文溪堂
- 3 田舎館村誌編纂委員会 1997 『田舎館村誌 上巻』 田舎館村
- 4 田舎館村誌編纂委員会 2000 『田舎館村誌 下巻』 田舎館村
- 5 青森県史編さん考古部会 2013 『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 6 青森県史編さん考古部会 2005 『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』 青森県
- 7 田舎館村教育委員会 2003 『田舎館村の大きな財産 垂柳遺跡』 田舎館村教育委員会